

## 国語の授業におけるタブレット端末の活用

田中 優子

近年、全国的に学校教育の ICT 化が進んでいる。筆者の在籍する聴覚特別支援学校高等部では、2015 年から iPad を授業で活用する環境づくりが始まり、現在は教員と生徒全員が iPad を持っている。科目によって ICT の取り入れやすさは異なると思われるが、適切に取り入れれば有効な補助教材となり得る。また、教科や学校という垣根を越えて、普通の授業でどのように ICT を活用しているのか、情報交換を教員間で活発に行えるようになれば、ICT 活用へのハードルも低くなる。今回は国語の授業でどのように iPad が活用できるか、その活用事例を報告する。

キー・ワード：国語 iPad ICT ロイロノートスクール

### 1 はじめに

筆者が勤務する聴覚特別支援学校では、2015 年から iPad を補助教材として取り入れ、少しずつ環境を整えてきた。現在は教員と生徒全員が iPad を持っている。学校教育における ICT の活用は近年非常に活発になってきており、各県の教育委員会でも ICT 活用の研修等が行われている。しかし、ICT を活用と言っても、何をどのように使えばよいか、最初は手探りという教員は多いと思われる。筆者もその一人であり、教員間で情報を共有し、サポートし合える体制をつくっていくためには、具体的な活用事例を公開していく必要があることを痛切に感じた。そこで、今回はロイロノートスクールというアプリを使って簡単に行える国語の授業実践の内容を報告する。

### 2 ロイロノートスクール

ロイロノートスクールは画面上で作成したカードを教員や生徒間で簡単にやり取りできるコミュニケーションツールである。カードを複数作って画面上で線で繋げていくこともでき、順番も簡単に入れ替えられる。新しいカードを作成して繋げるときに、web 上で検索したことをそのまま保存したり、カメラで撮影した写真を保存して繋げることもできる。MAP 検索の機能もついている。また、カードにはテキスト形式あるいは手書きで書き込むこと

ができる。

情報を共有したいグループをアプリ上で登録すると、そのグループ間でやり取りができるのだが、その際、一つのグループは一人の教員と生徒達によって構成される。登録したグループの中で生徒は教員から出された課題に答え、カードを提出することができる。その場合、教員は全員のカードを同時に画面で見ることができる。また、特定の一名あるいは複数名のカードを選んで画面で見えることもできる。出された課題は教員が「回答を共有」という設定をすれば、そのグループに登録されているメンバー全員が各自の iPad の画面上で見ることができるようになる。教員と生徒だけでなく、登録されているメンバー間でもカードを送り合うことができる。

ロイロノートスクールを活用した国語の授業事例はロイロの公式HPでも多く紹介されているが、発表やディベート等の特別な活動事例が多い。本稿では普通の授業でどのような活用方法があるかを報告したい。

### 3 現代文における活用事例

#### (1) 意味調べ

現代文の授業では、新しい単元に入るときは、事前学習として語句の意味調べをさせている。以前は紙に書いたものを提出させていたが、iPad を導入し

てからはロイノートスクールで提出させている。ロイノートスクールだと Fig. 1 のように提出日や締切時間を指定することができ、Fig. 2 のように生徒の提出状況も一目でわかる。また、生徒も締切日を忘れにくくなる。課題の指示もロイノートスクールを使って行くと記録性もあり、また、一瞬で生徒全員に送れるのも魅力である。特に聴覚に障害がある生徒に対しては、目に見え、保存性の高い形での指示は有効であると考えられる。

提出させたものは授業時にプロジェクターにそのまま映し出して確認し、比較することもできる。直す必要がある場合は教員がそのカードに書き込んで生徒に戻すこともできる。また、提出物に関しては、生徒と「出した、受け取っていない」というような押し問答をすることもないので、管理の上では透明性があってよい。

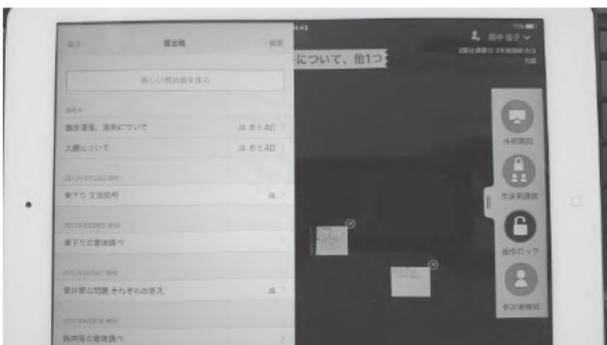


Fig. 1 課題の提出期限を示した画面

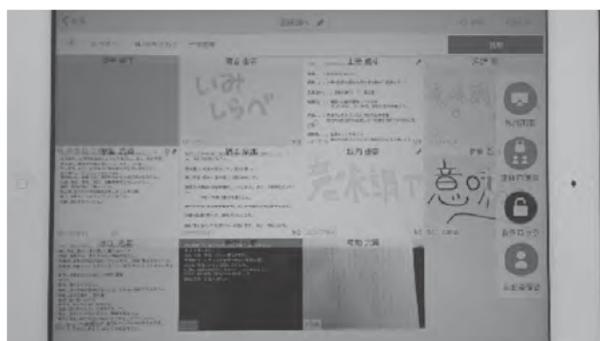


Fig. 2 意味調べが提出された画面

## (2) 生徒の発表

生徒が発表する場合は iPad でパワーポイントを使って発表することができるが、その生徒が作った

発表資料は PDF にしてロイノートスクールを使って教員に提出することもできる (Fig. 3)。これも、教員がコメントを書き込んで生徒に戻すこともできるので、生徒の元の資料を汚さずに済む。Fig. 3 も、生徒が提出した発表資料の表紙に「田中コメント付」と教員が書き込んだもので、それを生徒に返送した。また、iPad を導入する前は、発表資料が何ページにも渡る場合、それを生徒あるいは教員が印刷してコメントを書き込まなければならなかったが、ロイノートスクールを使うようになってからは画面上でコメントを書き込むことができるため、印刷の手間も省け、紙の節約にもなる。また、発表資料の場合、生徒は色にも気を遣って見やすい資料を作ろうとするが、学校の印刷機が白黒印刷に設定してある場合はそれがわからないので、電子データで提出ができるとその点もよい。また、ロイノートスクールのグループ間でのデータのやり取りは電子メールに添付して送るよりも手間がかからず、スムーズである。



Fig. 3 画面上で見る発表資料の表紙

## 4 古典での活用例

### (1) 意味調べ

古典でも現代文と同様に意味調べの課題はロイノートスクールで提出させている。生徒によってはノートに書いたものを写真に撮り、それを送ってくることもある。手書きの提出物は画面上で拡大して見ることもできるので、多少字が小さくても差し支えない。古典の場合は特に本文に合った意味が調べられているかの確認が必要であり、直す必要がある場合は生徒のカードに直接書き込んで送り返す。その状態が教員側でも生徒側でも保存できるので、

定期テスト作りの際等は、生徒が最初にどういう間違いをしたかを教員が確認するのもにも便利である。

## (2) 資料の配布

生徒に見せたい資料等も、ロイロノートスクールから直接ネット検索画面を開き、Google 等で調べて、そのページをスクリーンショットのように保存することができる (Fig. 4)。古典では例えば昔の調度類や本文に出てきた草花等を画像で見せたりするのも使っている。また、物語の舞台となっている土地の景色等もすぐに検索して見せることができ、それを保存し、尚且つ文字を書きこむ等、加工もできるので重宝している。

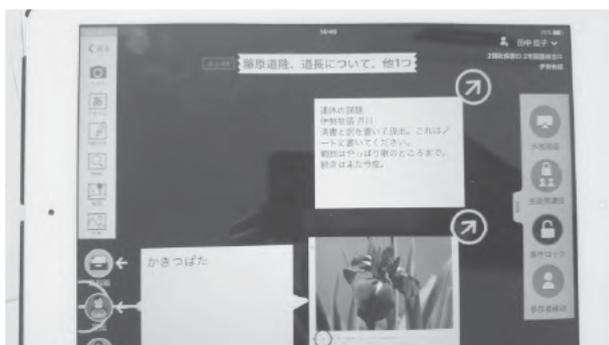


Fig. 4 web の画像を保存した画面

## 5 演習での活用例

### (1) 回答の共有

演習問題を解く授業の場合は、以前は生徒の回答を黒板に書かせて全員で見比べたり、直したりしていたが、板書は直接保存ができなため、教員がそれを記録して、後でパソコンで打ち直して保存する等の手間がかかった。しかし、iPad を導入してからは、生徒の答えはロイロノートスクールで問毎に提出させ、全員の答えを Fig. 5 のようにプロジェクターに映して比較できる。生徒の持っている iPad でも、教員が「回答を共有する」というボタンを押すと、生徒も教員と同様に他の生徒全員の回答を見ることができ、教員が書き込んだコメント等も全員で共有できる。そしてプロジェクターに全員の回答を映すことができるため、黒板のスペースを有効に活用することができる。生徒は教員の板書を写真に撮り、ロイロノートスクール上で保存することもで

き、扱った問題や単元毎にまとめておけるので、後で試験勉強のために見直す場合もわかりやすい。

### (2) 時間短縮

演習では生徒が何度も答えを書き直す場面はよく見られるが、ロイロノートスクールを使えば回答の訂正や差し替えも簡単にでき、書いたり消したり等の作業にとられる時間が省けるため、それだけ問題数をこなせるという利点もある。特に記述問題の場合、生徒が画面上で文章を推敲して何度も書き直すことがスムーズにできる。また、文字数も表示されるため、文字数を指定された問題の場合も自分で文字数を数える手間が省け、教室で限られた時間内に問題を解く場合は時間を短縮する効果がある。そのため、iPad を導入し、ロイロノートスクールを使って演習問題の回答を提出させるようになってからは、以前よりも多くの問題数をこなすことができるようになった。

ただし、入試などでは手書きで回答しなければならないので、普段から自分の手で書くことは大切である。宿題として課題を課す場合はまずきちんと手書きで回答し、その上でロイロノートスクールに提出するようにさせるなどの工夫が必要である。答え合わせの際は(1)で述べたように画面上で行った方が様々な利点があるが、補助教材の効果的な使用には、どの場面でそれを使うかの見極めが非常に大切である。



Fig. 5 演習問題の回答を映した画面

### (3) 教員の予習

課題の提出を授業よりも前に設定しておけば、生

徒の提出した回答を授業の前に見て、どの間についてどのような解説を加えればよいかを教員が予習しておくことができる。その際、ロイロノートスクールを使うと Fig. 5 のように問毎に生徒全員の回答を見比べることが容易にできるため、教員が効率よく予習をすることができ、授業準備が楽になった。

## 6 その他の活用例

### (1) 反転授業での活用

ロイロノートスクールを使って課題を出し、授業の前に生徒から課題を提出させ、教員が添削をして返却することも可能である。力のあるクラスであれば、扱う単元のポイントをそのような形で事前学習で理解し、更に内容を深めるための意見交換等に授業時間を充てる反転授業を行うこともできる。聴覚特別支援学校では教員が話しながら板書したり、生徒が教員の話聞きながらノートをとることができないため、授業に時間がかかるが、iPadを活用することで、効率よく時間を使い、その分扱う単元を増やすこともできる。

### (2) ブレーンストーミングとKJ法

小論文の授業での活用法としては、ブレーンストーミングとKJ法におけるロイロノートスクールの利用も可能である (Fig. 6)。

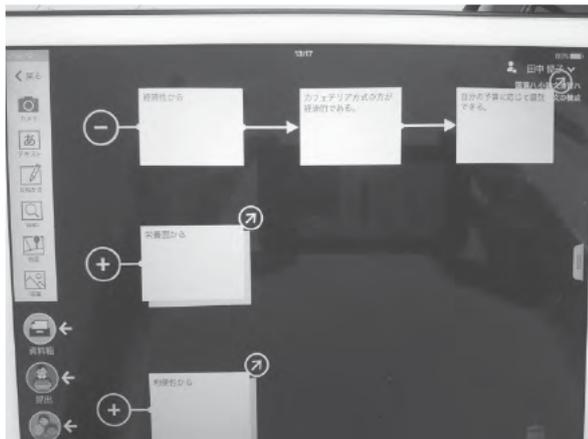


Fig. 6 ブレーンストーミングでカードをグループ分けした画面

小論文を書かせるにあたって、与えられたテーマ

についての生徒の考えを深めるため、最初にブレーンストーミングを行うというのはよくある手法である。生徒が思いついたことをどんどんカードにメモしていく際に、以前は付箋を使っていたが、付箋の代わりにカードをロイロノートスクールで作成し、カードのグループ化も画面上で行う。その際、画面上でカードを繋げてグループ化したり、順番を入れ替えたり、繋げたカードを切ったりするのが簡単に行える。

## 7 授業の保存

ロイロノートスクールを用いて教員の板書を写真に撮り、單元ごとに分類しておけば、教員が自分の授業を振り返る場合や、授業内容の確認をするのに便利である (Fig. 7)。

国語の授業では準備はしていても生徒からの発言は様々で、意図しない方向に話が広がる場合もある。そういう場合にメモをとらなくても、板書を保存しておけるため、授業の流れがスムーズになった。

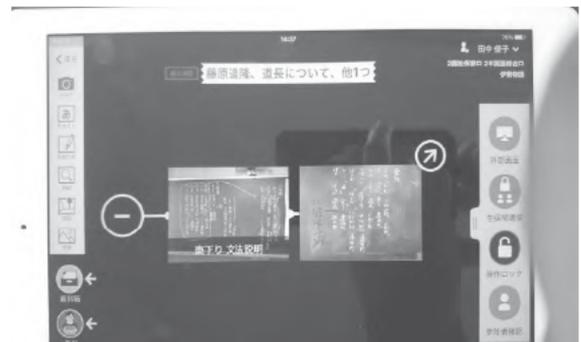


Fig. 7 板書を写真で保存した画面

## 8 まとめと今後の展望

以上、普段の授業でのICTの活用例を報告した。今回はロイロノートスクールというアプリの使用例のみの報告になったが、一つのアプリだけでもこのくらいの活用例があるということである。他にも授業に活用できるアプリがあればどんどん取り入れていきたい。ICTは普段の授業でいかに取り入れるかが継続的な活用につながると思われる。そのためにより多くの実践例を教員間で共有し、ネットワークを広げていきたい。具体的には次のような取り組み

が各学校、各教員で行える環境をつくっていく必要があると考える。

- ① 各学校の紀要やHP等で授業実践を報告する。  
また、外部からの問い合わせにも答えられる環境をつくる。
- ② 公開授業等でICTを活用した授業を積極的に行い、授業参観者からの意見も集める。
- ③ 外部のセミナー等にも教員が参加できるような仕組みを学校がつくる。
- ④ 企業や他校の教員を講師として学校に招き、アプリの使い方講座を開催する。

また、ICTは効果的に使えば様々な利点があるが、ICTはあくまで授業を補助する手段であることは忘れてはならない。ICTを使うことが主になってはいけない。ICTが必要な場面を見極め、児童・生徒に最も力がつくように、それぞれのニーズに合わせて使い方を考えていく。特別支援教育においては、特にそのニーズが障害の種類によっても様々であり、その教育における工夫も様々である。そこから学べることも多い。筆者の場合は、聴覚特別支援学校だけでなく、他の種類の特別支援学校や健聴の学校の授業実践例にも触れ、新しいことに気付き、多くを学んでいきたい。

#### 〔参考文献〕

株式会社ロイロ（2014-2017）授業支援ソフト【ロイロノート・スクール】主体的対話的で深い学び、授業例, 2017/12/28, <https://n.loilo.tv/ja/case>  
(閲覧日：2017年5月23日)